



木綿のようが 心のようが 人のようが

教祖は麻と絹とお話を下さいました。

「麻はなあ、夏に着たら風通しがよくて、肌につかんし、これ程涼しゅうてええものはないやろ。が、冬は寒うて着られん。夏だけのものや。三年も着ると色が来る。色が来てしまつたら、値打ちはそれまでや。濃い色に染め直しても、色むらが出る。そうなつたら、反故と一しよや。」

絹は、羽織にしても着物にしても、上品でええなあ。買う時は高いけど、誰でも皆ほしいもんや。でも、絹のような人になつたら、あかんで。新しい間はええけど、一寸古うなつたら、どうにもならん。

そこへいくと、木綿は、どんな人でも使

うている、ありきたりのものやが、これ程重宝で、使い道の広いものはない。冬は暖かいし、夏は、汗をかいても、よう吸い取る。よごれたら、何遍でも洗濯が出来る。色があせたり、古うなつて着られんようになつたら、おしめにでも、雑巾にでも、わらじにでもなる。形がのうなるところまで使えるのが、木綿や。木綿のような心の人を、神様は、お望みになつていなのやで。」

〔稿本天理教祖伝逸話篇二六「麻と絹の話より」〕

私たちが木綿のように、暖かく、人に寄り添って喜んで頂けるような心遣いで通らせて頂きたいものです。

本島大教会布教部(み)



天理教本島大教会